

# 帰郷、同居ばかりが 解決策じゃない

老親の安否確認は、まず近所付き合いから。まったくもって正論だ。だが、記者の故郷の秋田は、隣近所もすべて高齢者毛だつたりする。そんな場合は、遠隔操作で老親を見守るシステムがある。

ひとりの暮らしの母が住む実家に設置されたウェブカメラ、外に出る有楽町駅でスマートフォンを聞く、まんじゅうをほお張る母の姿がリアルタイムで映し出される。

近未来社会のここではない、すでに今、ICT(情報通信技術)を使つた遠隔見守りシステムは始まっているのだ。

監視とか、親の世話を機械に任せる不孝ぶりを嘆くのは簡単だ。しかし、東京や大阪で仕事しているまさにその時、最愛の母が家で倒れているかもしれない。死後に発見し、嘆いても遅いのだ。

ひとりの暮らしの高齢者は、全国に400万人、高齢者の孤独死は、年間1万5000人を数える。

全国介護者支援協議会理事長の上原晋光氏が言う。

「高齢の父が脳梗塞で倒れた。運悪く、母はスリパーに出かけて家に行かない、こんな例はよくあるでしょう。2、3時間の遅れが生死を分ける場合もある。もちろん、親を取引させて、一緒に暮らせればいいのだから、すべての家庭でできるかどうか、あまり現物的とは言えません」

その上原氏は、いま宮城県仙石の仮設住宅の前にいる。全介協がK&Dと共同開発した見守りのタブレット端末(無料)を配っている。



大きなは、デジタルフォトフレームなど、普段は、置き時計やカレンダーとして使用できるが、「緊急」をタッチすると、救急隊などに連絡がいく。「必ずな談話室」といふ画面もあり、日常は全介協につながっており、市町村のさまざまな悩みを相談するところである。

「お年寄りの孤独死を、少しでも減らしたい。今は被災地向けの実験運用ですが、将来的には全国のお年寄り世帯に広げたい」(上原氏)

# 老親の見守りは 遠隔操作でもできる

## ウェブカメラで日々チェック

NFCも今月から24時間見守りサービス「みまも」を入タイトはばかり。ここでは、NFCのサービスがお年寄りの行動パターンを学習し、普段と違う動きをすると、離れた家族に異常を知らせる仕組みだ。「例えば、冷蔵庫の扉が開く」

放しだつたり、夜中にテレビがついていたり、そもそも電気製品が使われていないなどの場合に、家族の携帯電話などにメールで連絡がいきます。当面は自治体や介護施設向けの販売で、1世帯当たり月額6000円の利用料を想定しています(同社

広報部) 外出先からでも、携帯電話ひきつり、つなげれば操作できる時代、またに弱い親に代わって、遠隔地からリモート操作ができればいい。

さらに発展し、究極の遠隔見守りには、徳島県上勝町が試験運用しているウェブカメラを使った「高齢者見守りシステム」だ。山に落ちている樹木をセンサーに備える「影」事業や、お年寄りのほとんどがパソコンを使ひこなすところでも有名になった町だ。

「同居などにカメラを設置し、遠く離れた暮らしの家族がパソコンや携帯電話でリアルタイムの映像を見守るシステムです。『親ではないか』と批判を浴びてきたのですが、すべての親が遠くには限りません。耳が少し遠いような場合は、イヤホン電話をしても通じない、映像を見られれば安心という利用者は多いのです」(住民課)

このあす、風呂上りなどは必ず服を着るようにはばかっていますか。

「重要なのは、機械ばかりに頼らず、マンに電話をかける声を聞くこと、なんでも、端

末システムを設置するよな家族は、逆に意識が高まるのか、電話の回数が増えるよつです」(上原氏)前出

「フェイスブックなどでもない友人をつくるより、ICTはこういふことに使つてほしい。価格が高まるはずだ。」